Fate/RADIANT MYTHOLOGY

蘇芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ＲＡＤＩＡＮＴ　ＭＹＴＨＯＬＯＧＹ

【Ｎコード】
Ｎ７９８７Ｙ

【作者名】
蘇芳

【あらすじ】
布団で寝ていたはずが、なぜかグラニデとかいう世界で救世主と言う名のディセンダーになりました。解せぬ。
なんやかんやあって戻った３年後、変な青タイツの人に殺されかけました。どうやら第五次聖杯戦争と言う名の殺し合いに巻き込まれた模様です。まじ解せぬ。
そんなノリでお送りする、まるでだめな作者の自己満足極まりない小説です。なにもいわず、生暖かい目で見てやってください。よろしくお願いします。

設定&ａｍｐ;注意　※１１月２８日更新（前書き）

この小説の作者は、小説を執筆するのは初めてです。
それを頭のはじっこの片隅に置いて読んでいただけたら幸いです。

※１１月２８日　使う予定の職業を『海賊』から『忍者』へ、『盗賊』から『聖騎士』へ変更しました。
　同日　詳しい設定に色々つけたし修正しました。

設定&注意　※11月28日更新

設定

名前　高倉（たかくら）　奏（そう）
性別　女
年齢　17
身長　167cm
体重　58キロ
容姿　知的な印象ではあるが、特別美人でもなければ特別可愛いわけでもない。割と筋肉質以外特筆すべきことは無い。つまりはご想像にお任せします。

補足という名の詳しい設定

・異世界へ飛んでから帰ってくるまでの大まかな流れ

中二病からようやく離脱しかけていた中学3年生の夏、布団で寝ていただけのはずなのに、なぜかパラシュート無しのスカイダイビング状態。解せぬ。
しかも異世界、なぜか自分が救世主という名のディセンダー。まじ解せぬ。
なんやかんやでエンディングを迎え、なんやかんやで地球に戻り、今に到る。時間はそのまま進んでいませんでしたと言うよくあるご都合主義。
中二病はとりあえず治ったけど完治はしておらず、まだその名残が

ある状態。

・帰ってきてから原作始まるまでの大まかな流れ

地球に戻ってきてから暫らくして、家の階段を踏み外す。結構な高さだったので思わず命の危険を感じ、向こうにいた頃と同じように受身を取ろうとしたところ、レディアント姿に変身できることが発覚。術も使えることが発覚。
普段は普通の女子高生。だがしかし、レディアントに変身すると人外のような動きをする。中二臭い。

・レベル
世界樹の洞、第１６層目にいるボスとタイマン張れる程度のレベル。

使う予定の職業

魔法剣士
聖騎士
ビショップ
狩人
忍者

の予定です。

注意

この小説はあくまで自己満足の元書かれた小説です。
あ、無理だな。合わないな。ツマンネ。と思われた方は、なにも見なかったことにして他の面白い小説を読まれることをお勧めします。
つまり何が言いたいかというと、絹豆腐メンタルなので罵詈雑言はしないでください。
お願いします。

第一話という名の導入部（前書き）

急ぎ足の説明みたいになってしまいました…。

※11月28日　使う予定の職業を『海賊』から『忍者』へ、『盗賊』から『聖騎士』へ変更しました。

第一話という名の導入部

突然で申し訳ないのだが、皆様は何の前触れもなく理不尽な目に遭遇したことはあるだろうか。

どんな事だって良い。小さなことでも、ほんの些細な、取るに足らない事だって良い。

例えば、給料日でお金を下ろしたばかりなのに財布を落としてしまったとか、学校でいきなり抜き打ちの持ち物検査やらテストやらがあったとか、バイト中に自分以外の誰かが起こしたミスを自分のせいにされ怒られたとか、交通ルールをしっかりと守ったのに相手の不注意で事故にあったとか。
やはりこれは十人十色。人の数だけ色々なことがあるのだろう。

さて、話は打って変わって、いきなり理不尽な目に遭遇したら皆様はどうするだろうか。

泣く？怒る？呆れる？呆然とする？唖然とする？途方に暮れる？現実逃避をする？現状打破に勤しむ？
やはりこれも十人十色。人の数だけ様々な方法があるのだろう。

またも話は打って変わって、なぜ皆様にこのような問いかけをした

のか、疑問に思っている方もいらっしゃるだろう。

しかしこれから話すことは荒唐無稽、俄かには信じがたい代物である。
だが、この話は本当に起きた出来事であって、妄想、空想、創造、などでは決して無い。
まあ、別にその話を何も一から十まで全部信じろとは言わないので、その一から十の前にある根本的な前提部分として信じてほしい。…覚悟はよいだろうか？

最初から最後まで語ってしまうと長くなるので簡単にまとめてしまうと、

布団で寝ていたはずなのに、気が付いたら異世界で、しかも救世主になっていた。

……うん、その反応はご尤もだ。間違っていない。間違っていないどころかむしろ正しい。
私も見知らぬ人間にそのようなことを言われれば間違いなく引く。たとえ友人でも引く。その出会いを無かったことにしてしまいたくなるくらいにドン引く。

だが、悲しいことに事実なのである。
布団で寝ていたはずなのに、なぜか上空で、しかも船を目掛けてパラシュート無しのスカイダイビング状態だった。…今考えるとよく死ななかったな、自分。
…まあそれはさておき、ひと悶着合ったりしながらもバンエルティア号という船に乗せてもらえることになり、グラニデという異世界と判明し、剣位は覚えておいたほうがいいと言われなぜか剣を習い、この世界にはディセンダーって言う救世主がいるんだよ☆ってピンク髪の美少女に教えてもらって、またひと悶着おきて、
某ドラゴン的なクエストな勇者よろしく、実は私が世界を救う救世主（ディセンダー）でした☆な落ちで。

そこからまたまたひと悶着合ってラスボスが判明して、ラスボス倒す準備をして、ラスボス倒して、エンディングを迎えてこっちに戻ってきました。おしまい。…な具合で。
…ん？今途中色々すっ飛ばしたろって？いやだって、長くっても面倒くさいだけでしょう？

あれ、何の話をしてたんだっけか。

…ああ、そうそう。理不尽な目に遭遇したときの話だ。

もちろん、最初は何で私がこんな目に、とか思ったけれど周りの人たちがよかったのか最初以外はそこまで理不尽なこととは感じなかった。本当に最初以外は。

そう、私が果てなく理不尽だと思ったのは異世界に飛ばされたことではない。
異世界に飛ばされた後のこと、つまり今だ。

こっちに戻ってきた後、異世界に飛ばされる前とまったく変わりない生活を送っていた。
普通に勉強して遊んで…、と別に何が変わったでもなく普通に過ごしていた。
受験も無事終わり、高校は近場の穂群原学園に入学した。
成績も上の下から中の上あたりをうろうろしているし、運動神経も抜群に良い訳ではないが、練習すればそれを極めている人ほどではないが、結構動ける。

ただ、ひとつだけ、おおきく変わったことがあった。

上に挙げたとおり、頭がすごく良くなったとか、運動神経が抜群に良くなったとかそういうわけではない。

ディセンダーとしてなのか、ただ単に経験が付いてきただけなのかは分からないが、

５つの職業（クラス）に変身（チェンジ）することができるようになったのだ。

いや、高校生にもなって変身っていう表現どうよとか思わないでもないのだが、表現としては間違っていないのでスルーして欲しい。

話を戻してそのことに気が付いたのは約２年前のことである。
それなりに高さのある階段から落ちそうになって思わず受身を取ろうとしたらなぜか忍者に職業変更（ジョブチェンジ）していたのだ。わけがわからないよ。
もう少し格好良くその事実に気が付きたかったと落ち込んだのは、まぁ内緒の話にして置くとして。

わかったことが、自分の意思で自由に変身できる。変身できるのは、魔法剣士、聖騎士、ビショップ、狩人、忍者の５つ。その職業の共通点はレディアント装備を持っていることだ。まあつまりは普通の制服からファンタジー要素満載なレディアント装備に変わるのである。

さて、今ここで職業変更（ジョブチェンジ）について説明し始めたことに、察しの良い人なら何か感づいたかもしれない。
いや、大体の人が私の回りくどい話にイライラしているかもしれないので回りくどいことは言わない。

端的に言ってしまえば私は今、狩人のレディアントに職業変更(ジョブチェンジ)をして逃げ回っている状態である。

なぜなら私は今、どこからも疑いようもなく果てなく理不尽な目にあっており、

全身青タイツの槍を持った青年に追い掛け回され命の危機に瀕しているからである。まじ解せぬ。

第二話という名の回想劇

さて、またも突然で申し訳ないのだが、私が如何にして全身青タイツの槍を持った奇抜な青年に追い掛け回されることになってしまった経緯をお話しようかと思う。

事の始まりは、英語の課題を学校に忘れてきてしまったことだった。

授業が終わった後、教室の掃除を手早く済ませいつものように教室で友人達と課題だるいねーとか喋っていたら見回りの先生から早く帰るよう促されて、慌てて逃げるように教室を出たのがいけなかった。

そしてまたそこから名残を惜しむように友人達とそこそこな時間まで公園で喋ってしまったこともいけなかった。

そして家へ帰り、母親の今日から出張ですと言うメモ紙を発見して、ああそういえばとそんなことを言っていたなと思いつつ、母親が作り置きしてくれていた夕食を食べ、さぁ課題を終わらせてしまおうと机へ向かった時に、課題を学校へ忘れたことに気が付いたのだ。

しかも時計の針が夕方から夜へ移動するかしないかと言う時間で、課題を取りに行くならダッシュで行かなければ学校がしまってしまうような時間だった。

英語の担当は藤村先生だし英語は一限目からだし朝から虎の咆哮を聞きたくない一心で、部屋着から制服に急いで着替え、学校へ向かったと言うわけだ。

ぜぇぜぇと息を切らせながらも学校へつき、幸運にもまだ昇降口は開いていたのでほっと胸を撫で下ろしつつ、夜の学校にびくびくしながら課題を取りに行った。

特に何事もなく教室へつき、課題を取って少し気が抜けてしまったのがいけなかったのかも知れない。全力疾走で疲れていた身体を少し休めてから家へ帰ろうと思い、それを実行したのがいけなかったのかも知れない。

いやだってまさか学校の校庭でドンパチやってる人達がいるとは思わないじゃないっすか。

今になってからこんな風に軽く言えるが、それを目撃したときの心情は半端なかった。全身青タイツと思われる青年と赤いマント靡かせた青年が戦っていた。しかも赤い青年の後ろにはたぶん私と同年

代と思われる少女も居た。どういうことだってばよ。
え？あれ？ここって日本だよねあれ？って言ってしまうくらいには動揺した。ていうか思わず声に出した。まぁ、自分でも聞こえるか聞こえないかくらいに声は掠れていたけど。

今までの経験か、それとも人間の本能としてかは分からないけれど思わず学校の女子トイレに逃げ込んだ。いや、だってテンパってたんです。
そして校内が少し騒がしくなり、落ち着いて暫らくしたころを見計らって外に出た。
案の定、校庭にはもう誰も居なくて、でもいやな緊張感は拭えなくて、夜の学校に入ったとき以上にビクビクしていたと思う。

とぼとぼ歩きながら、あぁあれって白昼夢だったのかなとか、疲れてたのかなとか、少し余裕を持って考えられるように落ちついた頃。変な夢だったなぁとか、疲れすぎて幻想でも見たんじゃないかと思いながら角を曲がった。———刹那。

「よお」

と、青年の声。

どこから？

「いい、月夜だと思わねぇか」

わたしの

「なぁ、嬢ちゃん？」

―――――！

後　ろ　から―

頭で理解する前に、本能が、全神経が、殺気を感じ取る。

逃げ切ることは、きっとできないだろう。

必然的に、殺し合いになることはもう、理解（わかって）している。

ならば…！

「…へぇ、今のを避けるたぁやるじゃねぇか」

「……ま、命懸かってますし？」

「ただの女学生だと思ってたんだがよ、俺の槍は避けるし、今、一瞬で姿が変わったな。

そのけったいな格好と、嬢ちゃんが一体何者かを、俺に教えちゃくれねぇか？」

「…答える義理は、ないですよね」

「はっ、そりゃそうだ。
まぁ、喋りたくなるようにすりゃいいだけの話だ……！」

「っ、むざむざやられてたまるかよ！！」

そして、私たちは、私と彼は走り出した。

私は彼から逃げるために。

彼は私を追いかけるために。

――――――――――――――――さて、前にも話はしたが一応私が変身した職業を教えておこう。

私は、戦える広い場所まで走るために、

五つの中で、一番敏捷値の高い
狩人に、職業変更をしたのである。

そうして話は、現在に戻る。

いや、でも全身青タイツってどうよ？

第二話という名の回想劇（後書き）

あれ、もしかしてシリアスぶち壊し？

第三話という名の戦闘劇（前書き）

捏造が入ってます。戦闘シーンがしょぼい上に少ないです。

第三話という名の戦闘劇

こうして私は紆余曲折を経て、全身青タイツの槍を持った青年に追いかけられることになったのである。

というわけで、現在。
決して近いとは言えないが全力で走れば近いかもしれない、そこそこの広さのある公園、というかほぼ空き地に向かって爆走中である。

その槍を持った青年は、あくまでも私の勝手な想像なのだが、少し楽しんでいる風である。
きっと、コチラの意図に気が付いているのだろう。
一体どこまでやれるのか、お手並み拝見といこうじゃないか、といった心境なのだろうか。それとも、どう甚振ってやろうかなんて心境なのだろうか。どちらにしろ腹立たしい。

とはいっても、結構いっぱいいっぱいなのでどうすることもできないのである。世の中って世知辛い。

しかし、自分が最速最強と驕っている訳ではないのだが、常人には追いつけないほどの速度で走っているにもかかわらず、青年は引き

離されること無く付いてきている。

まあ校庭でドンパチやっている時点で普通の人間ではないと思ってはいたが、ここまで来ると本格的に人間でない事が伺える。
しかも一種の神々しさと言うかなんというか、ありていに言ってしまえば魔力（マナ）の塊というか、魔力（マナ）が人型をとりそれに魂が宿ったように感じられる。

要するに幽霊もどきですねわかります。

物理攻撃って通用するかな属性攻撃：光とかじゃないと通用しないのかななにそれこわい。話がそれた。
いや落ち着くんだ、私。よく考えろ、私。
今の状況をよく確認すれば、必ず勝機は見えてくるはずだ。

童話に出てきそうなファンタジーな狩人のレディアント装備姿で爆走する、私。
それを追いかける、全身青タイツの槍を持った青年。

なにこれシュール。
余計に混乱しただけだった。

なんてアホなことを考えながら角を曲がる。目的地はもうすぐそこだ。

公園に着き、走るスピードを少し緩め、スライディングをしながら後ろを振り返る。

すでに青年は停止しており、不敵に笑んでいる。しかも、青年と私の距離は大分離れており、まるで、こちらの攻撃を誘っているかのようだ。

考えすぎと思われるかもしれないが、先ほどは攻撃できるような隙も無ければ、後ろを振り返る余裕も無かったほどに追い詰められていた。

……完全に、攻撃誘われてますよねこれ。

しかし、なぜ彼はこれほどまで、未知数の敵の前で余裕を持っていられるのだろう。

私の能力を知っている？――――――いや、彼は私にそれはなんだと問いかけた。それは無い。

彼は自分自身を最強だと思っている。――――――ありえるかもしれないが、そういうタイプには見えない。

残る可能性としては、――――――。

「なんだ、もう逃げるのはやめたのか？」

「逃げ切れると思えないし、ちょっととある可能性を確認したかったんで、ねっ！！」

――――――――――――敵から視線をはずさないままに、別方向に魔力（マナ）をこめて、弓を引き、矢を放つ。

その魔力を帯びた矢は、彼に一切触れることなく、一直線上にある木に突き刺さる。

――――――ビンゴ！

「おいおい、俺のことちゃんと見えてるか？どこに向かって撃ってんだ？」

「…お兄さんには、矢避けの能力（スキル）でもあるのかな？」

「…！？……へぇ、なんで分かった？」

「今撃った矢は、狙った敵へ向かって行く矢だったんだよね。
成程、お兄さんが余裕ぶっこくのも当然ってわけか」

「嬢ちゃんとの相性は最悪だぜ？潔く、諦めて俺に殺されるか？」

変身したとき、私はすでに弓を持っていた。
それを見て、彼は油断はしなくとも、余裕を持っていのだ。
相手の攻撃は自分に当たらず、自分の攻撃は相手に当たる。
私が言うのもなんだがずいぶんとまあチートな能力（スキル）だこと。
しかし、このままじゃまずいのも事実だ。
なるべく自分の手の内を明かさないのがベストなのだが、もうそんなことを言っている暇は無い。
――――――ならば。

「冗談きついぜお兄さん。確かにこのままじゃお兄さんとの相性は最悪だ。
だけど最悪なのは、狩人との相性だけであって、
他なら、難しいけど、最悪じゃない」
「…また、変わったな。
今度は、剣士か…？」
「ご名答」

ま、剣士は剣士でも魔法剣士だけどね。
声には出さず、改めてのステータスを確認する。スピードも申し分ないし、攻守ともにバランスの取れた職業。聖騎士でも良かったのだけれど、聖騎士は攻撃の振りが大きすぎるために却下。
なので、初見の相手と命のやり取りをする戦いには、この職業がぴったりだ。

「さて、お兄さん。私はこんな所で死ねないし、死にたくない。
そういう訳だから、全力で抵抗させてもらうよ…！」

「はっ、おもしれぇ！やってみな！」

踏み込みは、同時だった。

しかし、スピードはやはり彼のほうが上なのか、かなり開いていた距離があっという間につめられる。
そしてそのままの速度で槍を振るい、攻撃を仕掛ける。
私はそれを剣で受け流し、相手に一太刀浴びせようと剣を振るう。
相手はその攻撃を受け流し、また攻撃を仕掛ける。

一進一退、まさにこの言葉通りに攻守が反転していく。
だが互いに一歩も譲り合うことなく、各々の武器を振るう。
彼は私を殺すために。私は彼に殺されないために。

だが、その攻防戦にも綻びが見えてくる。

どういう訳か、私が彼のことを押し始めたのだ。

彼には無数の、決して浅いとはいえない傷がある。無論、私がつけたものだ。
対する私は、無傷とは言わないけれど、ほぼそれに近い位の浅い傷しか負っていない。

もちろん、こちらが鎧と盾を装備しているということもあるのだろう。
だがしかし、これは一体どういうことだろうか。
こちらからしてみれば好都合なのだが、どうにも違和感が拭えない。
何かのタイミングをうかがっているのか、それともこちらの攻撃パターンを観察しているのか。それらとはまた別のことか。

どちらにしろ、警戒するに越したことは無いな。

彼は、今も笑んでいる。

「なかなか、やるじゃねぇかっ！」

「それは、どうもっ！」

彼は楽しそうに言う。純粋に戦いを、楽しみながら。
いくつもの傷を受けながらも、それを感じさせない動き。押している
るのはこちら側なのに、まるでこちら側が押されているように感じ
られる。いや、押していると思っていただけで、実際に押されてい
たのはこちらなのかもしれない。

すると突然、彼はバックステップで距離をとり、槍を構えたまま、
動作を静止させた。
そして、おもちゃを取り上げられたような表情で口を開く。

「俺としては、もちっと続けてたいんだがよ、そうもいってられね
ぇみたいだ。
そろそろ、決めさせてもらうぜ」

そのまま彼は、きっと秘奥義に近しい技の、絶対的な宣言を口にす
る。

「刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルグ）――――！」

――――刹那、
彼はこちらへ跳躍する。私の心臓に狙いを定めて。
避けることはできない。防ぐことはできない。なぜか、そう感じられた。
せいぜい私にできることは、その槍を、この身に受けることだけ。
けれど、まだ策はある――――！
やってみなくちゃわからない、一か八かの賭けだけれど。
何もせずに、死んでしまうことは、もう二度とあの子に会えないまま消えてしまうのは、絶対に駄目なことだ！

息を吐き、感覚を研ぎ澄ませ、相手を見据える。
チャンスは一度きり。失敗したら、即ＤＥＡＤＥＮＤの大博打。
彼が目前まで差し迫る。
魔力を籠め、術式を組み立てる。
槍が、今にも心臓を貫かんとしたとき、この技は、発動する――――！
「――――！」

――――鮮血が、舞う。構えていた、盾を落とす。
槍は、確かに私を貫いた。

ただし、心臓ではなく、私の肩を。

――守護方陣。
自分の周りに小規模の魔方陣を張り、触れた敵にダメージを与える。
それを応用して、下から衝撃がくるように術式を組み替え、攻撃を上に逸らしたのである。

どうやら、今もこうして思考できているということは、成功したらしい。
彼は、一瞬驚いた顔をしてから、すぐさま笑みを浮かべ、私から槍を引き抜き、距離を取る。

「…こりゃ驚いた。一応これは、必殺を謳ってるんだがな」

「…ま、結構、ギリギリだったけど、…ね」

痛みでうまく、舌が回らない。肩が、焼けるように痛む。血が、急速に体内から失われていくのが分かる。
この感覚は、もう味わうことの無い物だと思っていた。アイツとの戦いで、もう最後だと思っていた。

けれど、私は今、確かに、戦っていた。
どこぞの打ち切り漫画のエンディングのように、私の戦いは、まだ続いていた。

「このまま戦い続けていたいのは山々なんだが、ご帰還命令が出やがった。
そういう訳でだ嬢ちゃん、今度は互いに、全力で殺しあおうぜ」
「はっ、やな、…こった」

そう言って青年は、まるで闇に溶けるように消えていった。
先ほどまで騒がしかった公園が、一気に静寂に包まれる。もう、この公園には、私以外誰もいない。

とりあえずそろそろ傷を治さなくてはとまずい思い、ビショップへ変身する。
術式を組み、キュアを発動させる。傷は問題なく治った。が、術が発動するまでに、結構時間が掛かってしまった。
これはきっと痛みのせいでも、血が足りないせいでもない。

先ほどの青年の言葉が蘇える。
『全力』で、か。一応、あれが全力のつもりだったんだけどなぁ…。

最後の戦いからもうそろそろ、後半年くらいで3年が経つ。それのブランクか、全盛期には程遠く、ぎこちない動きが多かったのだろう。現に術に倍近くの時間が掛かってしまった。
思わずため息がこぼれる。

あの青年は『またな』と言った。ということはまた私を殺しに掛かってくるのだろう。

それまでに、どうにかして身体を、ディセンダーであった頃の身体に戻さなくては。
今から気が重い。

あーあ、面倒くさいなぁ…。

そしてふと、公園にある時計を見てみる。
時計の針はもう夜中をさしていた。

これはまずいやばい。急いで帰って課題をやらなくて…は？

あれそういえば、

私、課題どうしたっけ。

今度は別の意味でため息がこぼれた。
夜風が、なんだか身にしみた。

第四話　一難去ってまた一難（前書き）

無駄に長いです。

第四話　一難去ってまた一難

爆走してきた道を、重い足取りで進んでゆく。

俯きフラフラしながら「課題…、課題…」とぶつぶつ呟きながら歩いている姿は、傍から見れば、きっと受験のストレスで自殺してしまった女子高生の幽霊のように映ることだろう。

幸いにも、すれ違った人はまだいない。

…一体、どこで落としたんだろう。

高校2年生にもなって、マジ泣き寸前である。

ちゃんと名前書いてあるし、誰か親切な人が拾って届けたりしてくれないかなぁ…。

今思えば、課題さえ取りに行かなければ、追い掛け回されたり、殺されかけたりすることも無かったのではなかろうか。

そうだよ、朝早起きして学校でやれば済むことだったんだよ。

…今更、後の祭りか。

しかし、本当にどこで落としたんだか。

思い当たるのは、学校…、は無いな。しっかり課題を抱え込みなが

らガクブルしてたし。後は走ってきた道と、死の追いかけっこが始まった所か。
あー、後者にあるっぽいな。レディアントに変身したのもそこだったし。きっと槍を避けたか変身したかの時に落としたのだろう。
いやまあ、帰り道だから別にいいんだけどね。でも疲れが一押しというかなんというか。やるせない気分でいっぱいな訳ですよ。

しかも言峰教会、もとい、冬木教会の傍を通らなくてはならないという事。それがさらにやるせない気分に拍車をかける。

さっき走っているときにはそれ処じゃなかったので気にはならなかったが、なんというか、こう、はっきり言ってしまうとあの教会の傍を通ると、気分が悪くなるし吐き気がする。
なんと言えば良いのだろうか。わかりやすく例えるならば、某スタイリッシュ戦国アクションゲームに出てくるＣＶ能登さんな第五天魔王の黒い手に手招きされて引きずり込まれそうになる。そんな感覚だ。

あの教会の神父も変な感じだった。
いや、神父に直接会ったことはないのだが、遠目から見たことがある。一目見ただけでなんかもう、吐き気がした。

そういうわけで、本来清浄なはずの教会なのに、いろんなどす黒さ満載な冬木教会とは相性が悪いのである。
……少し遠回りになってしまうが、別の道から行こうそうしよう。

まったく、今日は厄日なんじゃなかろうか。

課題忘れるわ人外がドンパチやってるわ追い回されるわ殺されかけるわで。

私は神様というものに何かやらかしただろうか。

別に神様とか信じてないけど。むしろ私が神様的存在だったし。一部の人間に崇められてたし。まあ向こうでの話だけど。

そうして、坂道に差し掛かったとき、

「あ、れ？衛宮君に…、遠坂さん…？」

一部の生徒の間で、実はアイツの夢は正義の味方なんじゃないかと噂されている衛宮君と、生徒全員の羨望の眼差しを浴びる、穂群原学園のミス・パーフェクトこと遠坂さん。あと黄色い雨合羽を着たなんとも形容しがたい美少女がそこにいた。しかもその美少女は人間ではなく、先ほどまで一戦交えていた青年と同じ気配。警戒はしているようだが、殺気は感じないので放置しておくとして…。

この三人の接点が見当たらない。

「っ…！あ、高倉…？。どうしたんだ、こんな時間に」

「いや、それは私の台詞だけども…。まぁいいや、実は落としてしまった英語の課題を捜索してました」

ここでかっこつけて、ちょっと散歩、なんて言おうものなら遠坂さんに絶対零度の眼差しで微笑まれながら、「へぇ、そうなんですか。」と言われそうな気がしないでもない。
それはなぜかって？彼女を見ていると、どういう訳か守銭奴（アニ）な猫かぶり（ス）を思い出すからだよ。

「あ、もしかしてこれのことか？」

「あっ…！それだ！ありがとう衛宮君！」

なんと、衛宮君が私の課題を拾っていてくれてたらしい。
直接渡せてよかった、と照れたように微笑んでいる衛宮君から直接課題を受け取る。…うっかり惚れちまったらどうしてくれる！この一級フラグ建築士め！
よかった、よかったと興奮する私を微笑ましそうに見つめる衛宮君。
ちょ、こっち見んなよ／／／／照れるだろ／／／／／／／／

すると、

「…ねぇ、高倉さん？」

と、冷ややかな声色の遠坂さんから声をかけられた。
課題が思わぬところで見つかり、興奮して熱くなっていた身体が一気に冷める程度に、彼女の声色はとても冷たかった。
油の切れたブリキ人形の如く彼女のほうを向いてみると、声色と同じくらい冷ややかな瞳なのに笑みを浮かべている遠坂さんと、視線が武器だったらまず間違いなく即死レベルなくらいに睨みを効かせた黄色い雨合羽の美少女がこちらを見ていた。

なんだか、いやな、あせを、かいてまいりました。

「どうして、高倉さんの課題がこんなところに落ちていたのかしら？
高倉さんのお家は、確か反対方向だったわよね？」

まるで囁くように、聞き分けの無い子供に言い聞かせるように問いかける彼女。
え、とおさかさんちょうこわい。
これはあれか、この私を差し置いて、何衛宮君と楽しそうにおしゃべりしてるのかしら？みたいな修羅場発生？
まずい、まずいぞ。私の明るい学校生活の為に何とかして彼女の誤解を解かなければ…！

「あ、いや、そのですね。話せば長くなると言うか、なんと言うか…。その…！

付加硬直なんです！！！！！」

一瞬、別な意味で空気が凍りました。ガリッって音もしました。

「すいません噛みました。
不可抗力なんです。すいません噛みました」

「えっ？ああ、うん。大丈夫よ？落ち着いて、ゆっくり話して頂戴？」

私は今、目も当てられないようなひどい顔をしているのだろう。遠坂さんが急に優しくなった。
だが痛い。これは痛い。遠坂さんのやさしさが痛い。衛宮君の気遣わしそうな目線も痛い。美少女の哀れむような視線も痛い。舌も痛

い。
とりあえず落ち着こうと深呼吸を繰り返し、何とか落ち着いたところで、口を開く。

「あー、その、ですね。課題を学校に忘れたことを思い出しまして。時間が夜に差し掛かってたんで急いで学校に取りに行って、帰ってくる途中に、なんていうか、その。
変質者に追い掛け回されまして。
たぶん逃げ回っているときに落としたんだと思います…」

嘘は言っていない。嘘は。

「それで、なんとか変質者を撒けたんで、落とした課題を探し回っている途中に遠坂さんたちに会ったしだいでございます…」

「変質者って、大丈夫だったのか！？」

「ああ、うん。なんとか」

純粋に心配してくれている衛宮君には申し訳なさを感じつつ、遠坂さんの方を窺う。
彼女は何かを思案し、何かに思い当たったような顔をした後、何事も無かったの用に、困ったように眉を下げながら、

「そう、大変だったんですね」

とだけ言った。
とりあえずは納得していただけたようだ。
ほっと胸を撫で下ろしつつ、それじゃあこれでまた明日。と立ち去ろうとすると、またもや遠坂さんからストップが掛かる。

「一応、先生と警察に不審者の特徴を伝えようと思うんです。
その不審者の、特徴と、何があったのか、何を見たのかを、全部、私に教えていただけますか…？」

……？こ、れは…？

これは、暗示、を掛けられているのだろうか？
彼女から、魔力が伝わってくる。なんか、こう彼女に洗いざらい全部喋ってしまいたくなる衝動に駆られるということは、これは尋問系の暗示なのだろうか？
…一応掛かった振りをしておいた方がいいのだろう。私は一般人ってことになっているし。でも全部を喋るわけには行かないし、ううん。どうしたものか。
…肝心なところはぼやかせば大丈夫、かな？よし、それで行こう。
唸れ私の演技力！

「誰かが、校庭で戦っているのを、見ました…」

「「「！？」」」

「遠くからだったので、よく見えなかったけど、怖くなって、女子トイレに逃げ込みました…」

「…それから？」

「静かになって、暫らくしてから外にでて…、帰り道で、変な人に、襲われました…」

「っそいつの、特徴は…！？」

「特、徴は……」

「　全身、青タイツ　」

「……、っはぁああ！！？？」

おお、暗示の魔力が途切れた。いやまあ、狙ってやったんだけどれも。私の演技力も捨てたもんじゃないね！
まあきっと遠坂さんたちは、槍を持っていたとか、そういった類の特徴を期待していたのだろう。

正直ここまで驚いてくれるとは思ってなかったよ、本当に。あ、衛宮君と美少女ずっこけてる。
いや、だってインパクトが強すぎたんだもんよ。あの青年の服装。
そして遠坂さん。貴女はやはり、猫被りだったんだね。

「ん？あれ、どうしたの三人とも？」

「あ、いや、なんでもない…」

「そう？それじゃあもう遅い時間だし、私はもう帰るよ」

「ええ、気をつけてね…」

頭が痛いと言う風に、元気の無い返事を返してくれる二人。
ごめんなさい、ぶっちゃけ速く英語の課題片付けたいんです。そしてこのままここで私と出会ったことは無かったものとして扱って欲しいかな。
ああ、ようやく家に帰れる。そう思いながら足取り軽く、坂道に背を向け、歩き出す。

「ねぇ、」

と、
背後からの呼びかけ。

「お話は終わり？」

幼く、天使を思わせるような少女の声。
そして、人ならざる者の、巨大で、凶悪な気配。
振り返ってはいけないと、本能が叫ぶ。
これは危険だ、速く逃げろと。

「――――――――バーサーカー」

と、誰かが呟いた。
思わずため息をつきたくなる衝動を抑え、後ろを振り返る。
そこには、
雪のような白銀の髪に、ルビーのような赤い瞳を持った少女と、
異質としか言いようが無いほどに凶悪で、いいかんじに最悪な、人
とは思えないほどの巨大な体躯。

「こんばんは、お兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

お兄ちゃん、となると衛宮君の知り合いか？
視線を投げかけてみると、彼の顔には訳が分からないと書いてある
かのように呆然としている。

「――――驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

遠坂さんが、まるで親の敵を見るような眼で、呟く。
美少女も、雨合羽を脱ぎ捨て、何処からとも無く取り出した剣を構
え、臨戦態勢に入る。

そして、私は――――――、

そういえば、今日の星占い、最下位だったなぁ。と、
現実逃避をしながら、これから始まるであろう戦いに、嫌な予感を
禁じ得ないのであった。

第五話　二度あることは三度ある（前書き）

中二病展開です。例の如く展開が速いです。

第五話　二度あることは三度ある

「アーチャー、」、と。

「アレは力押しでどうにかなる相手じゃない。ここは貴方本来の戦い方に撤するべきよ」

そう、遠坂さんが、見えないけれど、そこにいる誰かに向かって話しかける。
きっと、槍の青年とそこに居る美少女。そして白銀の少女の傍に佇む、あの禍々しい巨人と同じような存在なのだろう。
そして、力押しと本来の戦い方、という言葉から察するに、あまり前衛向きではないのだろう。

ああ、もう嫌な予感がひしひしと。

もうここまできてしまったら、巻き込まれるもクソも無いのだが一線はまだ越えてないはずだと自分に言い聞かせ、数歩後ろに下がって彼女達の会話を聞かないように勤める。
そして坂の上にいる、白銀の少女を観察してみる。
年齢は私達よりももっと下。とても愛らしく可愛らしいのだが、それは作り物めいた感じの可愛らしさだ。
私がそちらをじっと見ていたことに気が付いたのか、目が合い、こんばんはと微笑まれた。思わず会釈をしてしまいました。こんな時に何やってんだ、自分。

そして笑みを浮かべたまま、少女は口を開き、
これから宝箱を開ける直前の、わくわくとした、そんな声色で、――言う。

「相談は済んだ？なら、始めちゃっていい？」

少女は、映画のワンシーンのように行儀良く、優雅に、華麗にお辞儀をした。
何とまぁ、この緊迫した雰囲気に不釣合いな。そう思わないでもないが、そのお辞儀が一層緊迫感を高めている。

「はじめまして、リン。私はイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン――――」

何かその名前に思い当たることでもあるのか、遠坂さんが驚いたように身体を微かに揺らす。

憎々しげに、そのまま舌打ちでもしてしまいそうな雰囲気を纏わせ、顔が歪む。

そんな遠坂さんの反応に、まるでいたずらが成功したかのような笑みを浮かべる少女。

そして、そのまま、

「――――――じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

と言い放ち、それに呼応するように、黒い巨人が飛ぶ。

人に軽々しく殺すとか言っちゃいけません。なぜか、小学校の頃の先生を思い出した。

こうしてアホなこと考えている間にも、巨人は近づいてくる。
何十メートルかは知らないが、長い坂を一気に飛び降り、あっという間に目前まで巨体が迫る。

「――――シロウ、下がって……！」

――――――刹那、流星が落ちてきたのではないかと錯覚するくらいの『矢』が、黒い巨人の、おおよそ人間の急所と呼ばれる部分にぶち当たる。
数えて八撃。建物なんかは粉々になるんじゃなかろうかというまでの威力。普通の人間には、まず間違いなくオーバーキルになるシロモノだろう。
……普通の人間であれば、の話だけれど。

つまりはまあ、全く効いていない。

遠坂さんと衛宮君の顔が驚愕に染まる。

そんな二人を庇うかのように剣を構え、バーサーカーと呼ばれたこ

ちらへと向かってくる黒い巨人を迎撃する美少女。

ぶつかり合う剣と剣。火花を散らしながら剣が交差する。

今実際に自分の目の前で起きている出来事なのに、スクリーンを通して眺めているような気分で、私はその戦いを、他人事のように眺めて、ぼんやり立ち尽くしていた。

美少女が、力任せでありながら正確な一撃一撃を、見事な技術力によって捌いていく。それを絶妙なタイミングで援護する閃光の矢。しかし、やはりというか、そのバーサーカーは矢を物ともせず、美少女へ打ち込む。

美少女が善戦するも、敢え無く吹っ飛ばされ、アスファルトの上を転がる。

追い討ちを掛けようとするバーサーカー。それを阻止する為に放たれた、弾丸の矢。

その攻撃をものともせずに突き進む黒の巨体。

そして、美少女に強烈な一撃を叩き込み、再び、彼女は吹っ飛ばされた。

しかも頭を強く打ち付けたのか、彼女は地面に膝を付けたまま、一

歩も動かない。

そんな彼女に止めを刺そうと、巨人が歩み始める。

そうはさせまいと遠坂さんが、何か石のようなものを取り出し、呪文のようなものを唱え、放つ。

焦燥が顔に浮かんでいるも、確実に、かつ正確に、決して脆弱ではない魔力がバーサーカーへと向かってゆく。

だが、それも効かない。

衛宮君が、掠れた声で何かを呟く。

きっと、なんて化物だ――――。よく聞き取れないが、きっとそんなこと言っているのだろう。

続いて、白銀の少女が何かを言い放つ。

もう、なんて言っているのかが、分からない。聞こえない。

そしてその少女の言葉に呼応したのかは分からないが、バーサーカーは美少女に向かってもう一度、剣を薙ぎ払い、彼女はそれを剣で受け止めはしたものの、疲弊した身体で耐えられるわけもなく、

あっけなく、彼女は数十メートルも先にある荒地に吹き飛ばされた。

そして、またそれを追っていく、黒の巨人。今度は、白銀の少女を肩に乗せて。
美少女を助けるために、衛宮君と遠坂さんが走る。高倉さんは、ここで待っててと言って。

それを私は立ち尽くして、見ているだけ。

嗚呼、私は一体何をしているのだろう――――――。

美少女も見えない誰かも遠坂さんも衛宮君もただ立ち尽くしていた私を守ってくれていた私にも戦う術はちゃんとあったのに自分の保身の為に説明が面倒くさいと思って何もしなかったそんな中私に被害が及ばないように戦っていた美少女は剣を持って強大な敵に挑んだ見えない誰かは矢を持ってそれを援護した遠坂さんは彼女達のサポートに勤めた衛宮君は私を背に庇っていてくれていた彼女達は絶望的な状況でも諦めずに戦い続けていたなのになのに、

――――――私は、何もしなかった。

救世主（ディセンダー）が、聞いて呆れる。

いつから私はこんな臆病になったのだろう。いつから、自分のためにしか動けなくなったのだろう。

かつての仲間達がいないと、かってに地球(こっち)を見限って。
仲間の為に使っていたこのレディアントを、自分のためだけに使って。

私は、何がしたいのだろう。如何したいのだろう。

――――しかし、思考に嵌りそうになる直前、私にはもう、ある変化が起きていた。

ビショップになり、どういう訳か荒地の方向、彼らが走っていった方に向けて、
私もう、すでに走り出していた。

なんだ、もう答えは出ていたんじゃないか。

私は彼らを助けたいんだ。

私を助けてくれた、あの人たちを。
単純だな、私。いやまあでも、与えてくれた好意には、好意で返さなくちゃ。
私はさらにスピードを上げ、美少女を助け出すために、ただ走った。

荒地の先には、確か墓地があったはずだ。
美少女がそれに気づいてうまくやり過ごしていて暮れればいいのだが。念のため、さらにスピードを上げる。

それが功をなしたのかどうかは知らないが、墓地に到着した。

どうやら、墓石を盾に戦い続けているらしい。遠坂さんと衛宮くん

も居る。
無事、ではないけども、まだ生きてくれているようで何より。
向こうはまだこちらに気づいていない。
それは好都合。いつものように術式を組み立てる。魔力の無駄なく、正確に、迅速に。
あれだけ急いだのにも拘らず、思考はいやにクリアだった。
術式を組み終える。後は発動するだけ。
覚悟は決めた。後は、戦い抜く意志を持つだけ――――――。

「――――――キュア！！」

美少女にあった傷が治ってゆく。それを確認して、また新たな術を発動させるために杖を構える。
それから、その場に居た全員が、私と言う闖入者のほうを向く。

「…え？たか、く、ら……？」

衛宮君が恐る恐るといったふうにこちらに問う。
突然の乱入に加え、制服ではなくローブを着用し、あまつさえ、術

を使ったのだから、彼の反応は当然と言えば当然だろう。
そして、やはりと言うか、一番初めに平静を取り戻したのは白銀の少女だった。

「へぇ、お姉ちゃん、面白い魔術を使うのね。しかも、さっきまで魔力なんか一欠けらも感じなかったのに」

探るように目を細め、こちらを窺う少女。
しかし、私はそれを意に介さず、ありったけの魔力を籠めて、術式を組む。
この術を使うのは大分久しぶりだし、下手したら、遠坂さんたちにまで被害が及びかねない。
余計なことに思考を割いている時間はない。彼女と、彼女に付き従う巨人の意識が、認識が、敵とみなされる前に、完成させなければ――――!!

「ちょっと、お姉ちゃんってば聞いてるの？」

「――――――――――――――。」

「…つまんないっ。やっちゃえ、バーサーカー!!」

バーサーカーは少女の声に反応し、明確な殺意と敵意をこちらに向ける。
そして私を殺すために、一歩一歩こちらへ近づいてくる。

しかし、まだ詠唱は終わらない。

遠坂さんのあせったような声が聞こえる。
衛宮君の逃げろと言う声も。

巨人はもう、目前まで迫っていた。
そして、彼は剣を振り上げ、私は――――――――。

「――――――ディバイン・セイバー！！」

術を、発動させた。何とか間一髪、間に合ったようだ。

バーサーカーの頭上に、魔方陣が展開される。私はそれを合図に、
その場からすばやく離れる。

――――――――そして無数の雷が、彼を襲い、撃ち貫く。

「■■■■■■■■■■■■■■■！！！！！！！！」

腹のそこにまで響くような咆哮。
そして、あたりは一面の砂埃に覆われる。

「…や、ったの…？」

あ、それはまずいぞ遠坂さん。
だってそれは、

「すごい……。
バーサーカーを、

…5回も殺すなんて…」

少女がそう呟いた後、お約束のように砂ぼこりが晴れる。
そこには、お約束のように、

黒い巨人が立っていた。

第六話　長い夜の終わり（前書き）

テスト期間＆Ｆａｔｅのゲームディスクが破損してしまったので更新が激減します。
申し訳ないです。

第六話　長い夜の終わり

「すごい……。
バーサーカーを、

…5回も殺すなんて…」

問題なく術は発動した。
術式も間違っていなければ、詠唱も間違っていない。
魔力も多すぎるくらいに籠めたし、完全に直撃していた。

私は、確実に息の根を止める気でいた。

なのに、黒く禍々しき巨人（バーサーカー）は何事もなかったかのように佇んでいた。

え、ちょっと待て。え、本気で？
なんで生きてんの？ちょっとまって、え？
どういうことだ、しかも5回も殺したってどういうこと？どういうことなの？
リバースドール的なアイテム！？聞いたことしかないけど、見たこともなければ使ったこともないけどそういう効果なアイテム使ったのあれ！？

え、レイズデッド使ったの！？つまりなんで生きてんの！？

そんな混乱している私を嘲笑うかのように、白銀の少女は得意げに言う。

「ふふ、驚いてるね、お姉ちゃん。
いいよ、面白いもの見せてもらった換わりに教えてあげる。
バーサーカーの真名はヘラクレス。１２回殺さなきゃ死なないの」

少女の口から、絶望的な言葉が紡がれる。
１２回殺さなくてはならない。彼女は今さっき5回死んだと言っていた。あの怪物が、完全に活動を停止するまでにあと7回息の根を止めなくてはいけないらしい。
つまり、ゲームで言うところの残機がまだ残っていると。

うわぁ…、本気（マジ）で？

「大英雄ヘラクレスは神に与えられた十二の試練を乗り越えて不死の権利を得た。そして、バーサーカーは乗り越えた死の数だけ命のストックがある。それがバーサーカーの宝具『十二の試練』」

「そんな…、でたらめだ…」

衛宮君が呟く。その隣に居る遠坂さんと美少女も、同じようなことを思ったのだろう。その顔は、驚愕で彩られている。
それを見て、更に気分を良くしたのか、笑みを深めた少女が言う。

――――――――――見逃してあげる、と。

その場に居た全員が呆気に取られる。
見逃すと、確かに彼女は言った。

…さっきまで殺すとか言っていたのに、一体どういう心境の変化だろうか。
いや、捻くれた考え方はいくない。見逃してあげるとか上から目線の言い方にちょっと引っかかってしまうけれどいや内弁慶な考え方もいくない。……まあ今日はこれで終わりにしてくれると言うのだからありがたくその好意に「一体どういう心境の変化かしら？なぁに？ここまでやって逃げるの？」うおーい遠坂さんくうきよんでー！私も思ったけどくうきよんでー！

しかし少女はそんな遠坂さんの挑発を、さらりと涼しい顔で受け流しながら言う。本当は彼女のほうが年上なんじゃなかろうか。

「ええ。本当はあなたたちのことなんて、さくっと殺して終わりにしようかと思ってたけど、気が変わったの。
興味がわいたから、今回は見逃してあげる」

行きましょう、バーサーカー。

その声とともに巨人が動き出す。
そして、

「今度は、お姉ちゃんが何者なのか教えてね」

そう言い残して、黒の巨人とともに、白い少女は姿を消した。

取り残される私達。
辺りが静寂に包まれ、なんともいえない空気になる。
さて、どうしたものか。正直言うと私はこのまま帰って布団で寝たい。
え？課題？知らないよもう学校に行く元気もないよ。

でも、そうは行かないんだろうなぁ…。

それはなぜかって？

「高倉さん？ちょーっといいかしら？」

もう猫被ったって意味はないのに恐ろしいくらいの猫撫で声で私のことを呼びつける遠坂さんが居るからである。

ところ変わって衛宮邸。墓地で立ち話もなんだからと衛宮君が気を利かせて招待してくれたのでした。

そして今現在、私は遠坂さんに正座をさせられていた。正しくは、

遠坂さんが自主的に正座をしたくなるようなオーラを出していた。
まじこわい。

座卓を挟んで私の目の前には、あかいあくまおっと間違えた。遠坂さんが仁王立ちをしている。
その横では衛宮君がおろおろしており、美少女はこちらを気の毒そうな眼で見ていた。
いや気の毒と思うなら助けてくれよ。そう思って美少女のほうに眼を向けると、さっと視線を逸らされた。
よのなかって、せちがらい。

「さて、高倉さん？私、高倉さんに聞きたいことがあるの」

あなた、何者？

にーっこり。文字にするならそんな言葉が合いそうな笑いで私に問いかける。
来ると思ってましたけどねこの質問。似たようなこと前の二人にも聞かれましたもの。
覚悟決めた時点でそんな予感はしてましたもの。

まあでも、もう逃げないって決めたし。

潔く答えようじゃありませんか。

「何者……ね、答えは簡単だよ。

ただの普通の女子高生。

ってごめんなさいこの緊迫した空気をどうにかしたかったんですちょっとしたジョークなんですごめんなさい離して折れる折れるってばこれ痛い何これ痛いイタイイタイイタタタタタタタタタタ！！！！！！」

光速で座卓を越えこちらに来た遠坂さんに、全力で関節技をかけられました。無表情で無言なのが、とっても怖かったです。

次ふざけたらブッコロスというお言葉を頂いてから開放してもらいました。

閑話休題（話がそれた）

「……一応、先に言っておくけど、俄かには信じがたい話だよ。いまだに自分でも信じがたい。けれどそれは確かにあったことで、実際に起きた出来事。

話は、私がなぜか異世界に飛ばされてしまった所から始まります――――――――。」

そう前置きをして話しはじめる。

異世界に行くまでの経緯。

異世界にたどり着いてからのこと。

助けてもらったこと、船において貰えるようになったこと。

その船が簡単に、ありていに言ってしまえば何でも屋であること。

魔物（モンスター）と呼ばれる生き物がいて、せめて自分の身は守れるようにと剣を教わったこと。

様々な人たちとの出会いのこと。

いろんな人たちの不安と苦しみを聞いて、見てきたこと。

その世界にはディセンダーと呼ばれる救世主がいること。

そして、

その救世主（ディセンダー）が、自分であったこと。

様々な出来事を、順を追って話していく。

つらいこともあった、苦しいこともあった、理不尽なこともあった。

けれど、仲間が居た。友人が居た。自分を、支えてくれた人たちも居た。

そして、……アイツとの、最後の戦いのことも。

一つも話を取りこぼさないように、細々と話していく。
確かにあったのだと。嘘ではないのだと。そんな、子供じみた不安を抱えて。

確かに私はそこに居たのだと、証明したくて。

そんな私の話を、3人はただ静かに聴いていた。

「――――――以上の経緯を持ちまして、今の私がある所存でございます」

話し終えてから、一息つく。

…なんか、重い空気になってしまった。そんなことはないようにと細心の注意を払って語ったのだが、何処となく空気が重い。いや、私の対（ゲーデ）のとこらへんは重かったけども。

遠坂さんも衛宮君も美少女も、完全に俯いてしまっている。

一体何がいけなかったのか。

一体どうしたものやら。

とりあえず、今日は帰るか。

聞きたいことは明日また聞けばいいし。

「さて、私はそろそろお暇するよ。もう、結構な時間だしね」

空気を変えるために、きわめて明るいトーンで言う。

が、しかし。

３人はいまだ沈黙したまま。
あれ、これもしかして寝られてる？
そうっと窺ってみると真剣な顔の３人。あ、自分の世界に入ってたんですね。そりゃ返事がないはずだわ。

一応メモ紙でも残しておいたほうがいいのか？まあ別にいっかと自己完結して立ち上がり部屋を出る。
だが部屋を出る直前、襖とか、閉めていったほうがいいのかなぁと、唐突に思う。
私は他人の家にお呼ばれしたことがないので（友達が居ないわけじゃないみんなアウトドア派なだけ）、ちょっと悩んで、閉めていくかと後ろを振り返る。

――――――――――ん？あ、れ？

視界が、ぶれる。
こきゅうが、できない。

な、んで。

あ、これ、知って、る。

魔力(マナ)不足だ。

魔力(マナ)不足で倒れるとか懐かしいなぁ、

すべてがスローモーションに感じられる。
目線を向けると3人の驚いたような、焦った顔が見える。衛宮君がこちらに手を伸ばす。この距離じゃあ届かないって。
あとちょっとで床に身体を打ち付ける。

痛いのは、嫌だなぁ、

くしゃり、と顔を歪め、これからくるであろう痛みを覚悟する。

しかし、

いつまで経っても痛みはやってこない。

からだを、支えられている。

衛宮君でも、遠坂さんでも、美少女でもない、別な、人の腕。

「今は、眠れ」

ひくい、おとこのひとの、こえ

その認識を最後にして、

私の意識はブラックアウトした――――――。

第七話　夜が明けてからの一騒動（前書き）

無駄に長いうえ無駄にアホいです。

第七話　夜が明けてからの一騒動

「それで？話って何ですか？私、この後急ぎの予定があるんですけど…？」

いつものように依頼を終え、チャットに報告をし終えた後、採ってきた薬草を医務室の棚に補充して、さてそろそろ急いで出掛ける準備をせねばと医務室を出ようとした矢先。
医務室にジェイドが入ってきて、話があると捉まったのだった。

「まあまあ、そんなに急かさなくてもいいじゃないですか。
私と貴女は一心同体、二人で一人、恋人なんて甘っちょろいにもほどがある間柄でしょう？」

「いやそんな親しくないですよね！？なに人間関係勝手に捏造してんですか！？
ていうか私本当に急いでるんですって！」

何言ってんだこのおっさん！と言わんばかりの勢いでジェイドに噛み付く。
それを楽しそうに、それはもう楽しそうにはっはっはと笑うジェイド。畜生腹立つ。

普段ならはいはいと受け流すことができるのだが、今回ばかりは訳が違う。

アニスと買い物の約束があるのだ。

しかもどういう訳か、今回は珍しくアニスが一緒に買い物に行こうよと言ってきたのだ。
普段はこちらが誘わない限り、滅多に買い物に行かない彼女からの誘い。
なんでも今日、有名ブランド店で1年に1回の大安売りがあるらしく是非行きたいとのだと言っていた。それも嬉しいことに私と行きたいのだと。
そんな彼女のお誘いを断るはずもなく、二言目には了承をした。

ただ、やはり有名なブランド店の大安売りと言うことで、毎年戦場のような感じになるらしい。
そのため、早く並ばないと出遅れてしまう。そうならないため、いちいち一緒に行くのでは時間が掛かるし互いに依頼もあったので、現地集合となった。その際、

待ち合わせ時間に遅れないでね。遅れたら十六夜天舞だから（はぁーと）

と可愛らしく天使のような笑顔で脅され、もとい、お願いされてしまったので焦りは尚のこと倍になる。
なので普段は簡単に受け流せるような事でもイライラしてしまい、結果、ついつい相手の喜ぶ反応をしてしまうのだった。

「さて、ソウで遊ぶのもここまでにしておいて…」

（このおっさん……！！）

「話、というよりも貴女に用事があるんですよ」

「それって、今じゃなきゃ駄目なんですか？」

「ええ、今じゃなきゃ駄目です」

先ほどのニヤニヤとした笑いから一転、急に真剣な顔になる。

……何かあったのだろうか？

「時間はそんなに取らせません。お願いです、協力していただけますか…？」

真剣でありながら、どこか物悲しい表情。

……うう、くそぅ。

「…わかりました、協力しますよ…。それで、私は何をすればいいんですか？」

「こう…、両手を出して、目も瞑っていただけると…」

一瞬。ほんの一瞬だけれども、本能が警鐘を鳴らす。

このままジェイド（コイツ）を信じていいのだろうか、と。

だってジェイドには前科があるもの。料理の味見をして欲しいと、

味見をさせられた料理に痺れ薬が入っていて危うく解剖されそうになったことがある。科学部屋に連れて行かれそうになった所をたまたま通りかかったクラトスに助けてもらい、なんとか無事はあったが。
その後クラトスから聞いた話では、異世界人でしかもディセンダーというのが彼の興味をひどく惹きつけたらしい。もっと穏便な方法はなかったのか。血液採取なだけハロルドのほうがまだマシだったよ！

いやでももう時間無いし！なんだかんだ言ってジェイドもいい人だし！そんな外道なことしないよね！

覚悟を決め、目を瞑って両手を揃えて前に突き出す。でもやっぱり疑いは拭えないので警戒はしておく。

が、

暫らくしても何もされない。

何もしてこない…。ああ、なんだ、やっぱり私の考えすぎか。
ほっと気が緩む。しかし、ジェイドはこれで何をしようと‐カシャンッ‐

え？カシャン？

両手首に冷たく、重い感触。

まさかと思い、目を開いてみる。そこには案の定、黒い手枷がつけられていた。
そして極めつけの一言。

「まったく、ソウは学習しませんねぇ」

やれやれと言った風に肩をすくめ、苦笑に呆れを交えさせるジェイド。
そしてそのまま私をベッドに突き倒し足枷をつける。その間実に3秒。腹立たしいまでに器用な男である。なんてこと考えてる場合じゃなくって、

「やっぱりこういう展開かよ！！！」

「いやー、わざわざアニスに協力を頼んだ甲斐がありました。
まあそういうわけなので、十六夜天舞を喰らうことはないのでご安心を」

「あ、よかった…じゃなくて！アニスもグルなの！？っていうよりもいい加減私の解剖諦めろよ！！
私は普通の人間だよ！！！この鬼畜眼鏡！！！」

「そんなに心配しなくとも、大丈夫ですよ。痛いのは最初の麻酔だけで、後は痛みも何も感じませんから。
ハロルドのお墨付きです」

「なお怖いわ！！そして私の話を聞け！！！」

「――――――それでは、解剖（オペ）を始めます」

「え、いや、ちょとまっ……」

「うわぁぁぁぁぁああああああああああああ！！！！！！！」

「うわっうるさっ！ちょっと、いきなり何！？」

夢かー！夢落ちかー！！夢でよかったー！！！
夢って言うか過去の記憶だけども！実際にあったことだけども！
それでも夢でよかったー！
まるで全力疾走した後のように荒い息をする。体温がえらい低い。割りに汗が凄い。
悪夢は、忘れた頃にやってくる…！

「はー…、ちょっと、大丈夫なの？」

「あ、遠坂さん…」

「『あ、遠坂さん…』、じゃないわよ。死んだように眠ってると思ったら、いきなり飛び起きて叫びだすし…。
何事かと思ったわよ」

「あ、や、なんというか、その、申し訳ないです…」

どうやら傍にいた遠坂さんを驚かせてしまったらしい。

だってあんな夢見るとは思わなかったんだ…。

「…で？もう体は大丈夫なの？なんだったらまだ寝てていいのよ？」

「あ、うん。それはもう大丈夫」

「そ。今、衛宮君がご飯作ってるから、食べられるようなら食べときなさい」

「う、うん。ありがとう…？」

何でだろう。遠坂さんが異様なほどまでに優しい。
いや別に遠坂さんがいつも冷たいとかそういうわけでもなく。というよりも私遠坂さんは昨日の夜、初めてまともに喋ったので、彼女の性格をとやかく言える立場ではないのだが。
なんか、こう、私を解剖せんが為にあの手この手を使う前のジェイドの様な…。

ジェイ、ドの、様な…？

「ねぇ、遠坂さん？」

「ん、何？どうしたの？」

「その…、

左手に持っている注射器は、一体なんなのでしょうか…？」

遠坂さんの左手には、やたらと大きな注射器が握られていたのである。

なにこれこわい。

一瞬の沈黙。

「私、あの一晩で色々考えたの」

のちに、口を開く遠坂さん。
口調は驚くほどに穏やかで、これからハッピーエンドが決定された物語を語りだしそうな、柔らかな声。
彼女の瞳はひどく澄(かんばせ)んでいて、凪いだ海を連想させる。
またその整った美しい顔は慈愛に満ちていて、聖女や慈母を思わせる。

なのに背後のオーラがどすぐろい。

どす黒いのではなく、どすぐろい。
この世の黒と言う黒をかき集め、様々な色を配色などは全く無視してかき混ぜたような、と言えばお解かり頂けるだろうか。

つまり、見た目と背後のオーラとのギャップがこわい。超怖い。
すべてを投げ打って土下座をしてしまいたくなる衝動をどうにか押さえ、言葉の続きを待つ。

「衛宮君は、まあいいわ。例え私が狙っていたセイバーを召喚したとしても、彼は半人前でも魔術師だもの。
でもね、私が何よりも許せないのはね、高倉さん。貴女なの」

「……そ、そうなんですか…」

「魔術師でもなんでもない、普通の人間が、布団で寝てたら異世界でした？
こっちが一生懸命、それこそ一生をかけて、それが何代にも続いて…。魔術師の一族総出での永遠の課題なのよ？
それを、それをっ……！！！」

「……えっと、…その、なんかごめんなさい……」

あのでも不可抗力な出来事だったんです。

そんなことを言っても今の彼女には火に油を、いや、劫火にガソリンをまく勢いだろう。
それを彼女に告げた瞬間、私の人生はそこで終わるに違いない。
そう思わせる何か、っていうか怒りが彼女にはあった。

しかし、ある程度怒りをコントロールできるようになったのか、一度深呼吸をしてまた口を開く。

「だからね、考えた結果、高倉さんにちょっと協力してもらおうと

思って」

「きょ、きょうりょく……？」

嫌な予感がする…！
しかもなんかすっごいデジャビュ…！

「最初はね、解剖を考えたの。でもほら、高倉さん女の子だし、痕残っちゃったら嫌じゃない？
だからね……、

血を採取させてくれないかしら？２リットルくらい」

「いや死にますってそれ」

真顔でとんでもないことを言い出す遠坂嬢。
いや普通に死にますってそれ。

「安心して？じわじわと死ぬか死なないかの、ギリギリのラインはちゃんと見て採取してあげるから」

「いや安心できないよ！？え、つまり私は血を抜かれて半殺しにされるの！？」

「半殺しだなんて、人聞きが悪いわね。ちょっと未来への尊い犠牲になるだけよ」

「殺す気満々じゃないですか！？助けて！衛宮くーん！！！！」

「残念だったわね、高倉さん。さっきはお昼を作ってるって言ったけど、
衛宮君は今、藤村先生にお弁当を届けに行っているからここにはいないの」

「計画的犯行！？え、ちょ、こっちこないでぇぇぇぇぇ！！！誰かぁあああ！！！！」

先ほどの聖女のような顔から一転、ニタリと悪魔のような顔で、注射器を片手にこっちににじり寄る。
こ、ここで私の人生は終わってしまうのか…！？

「フフッ、さぁ、観念なさ、っあ痛！！」

「――――リン。君は病み上がりの人間に、一体なんという仕打ちをしているのかね？」

あかいかくまを止めてくれたのは、赤い服が印象的な、白い髪の肌が浅黒い男の人でした。チョップで止めてました。ついでに言うと結構痛そうなチョップでした。
あれ！？今どこから出てきたの！？

「ウチのマスターが失礼をした。体調などに影響はないか？」
「あ、はい。ちょっと叫び疲れただけで、特に影響はないです…？」

思わず疑問形になってしまった。
しかし、彼の声はどこかで聞いたことがあるような…。
って言うかマスターって？え、どういうこと？

「ちょっと、なにすんのよアーチャー！」

「なに、病み上がりの人間に無体を働くマスターを見ていられなかった。それだけのことだ」

「だって高倉さん、打てば響くんですもの」

「……そういう問題ではないだろう…」

2人の漫才めいた会話をぽかんと眺める。
そういえば私、昨日のやりの男の人も、白銀の少女のことも、バーサーカーと呼ばれた大男のことも、美少女のことも、当たり前だが今目の前にいる男の人のことについて何も知らない。

もちろん遠坂さんのことも、衛宮君のことも、彼女達の言う魔術師の意味も分かっていない。

成り行きって戦ったって言うか、戦うって決めたのは私だけど、半ば巻き込まれるに近い形での戦闘だったからなぁ…。

遠い目をしながら、彼女達の方向に目を向ける。
すると男の人がこちらに気付く。

「すまない、自己紹介が遅れたな。私は彼女のサーヴァント、アーチャーだ」

「あ、ご丁寧にどうもありがとうございます。私は高倉奏って言います。
それであの、さっきから気になっていたんですけど…、質問いいですか？」

「私に答えられる範囲のことであれば」

「その、さっきサーヴァントとか、マスターとか言ってましたけど…。それって何ですか？」

ピシッ。

文字にするならこんな感じ。
つまりその場の空気が凍りついた。

「……マスター」

「う。な、なによ」

「まさかとは思うが、
彼女に、何の説明もせず、君は魔術師としての怒りを爆発させたのかね？」

「だ、だって…」

「魔術師は等価交換を原則としている。
君は彼女に説明を求めた。ならば君からも起きたことを説明すべきだろう。
怒るなとは言わないが、せめて彼女に、この戦争のことを教えてからでも良かったのではないか？」

やれやれと彼は肩をすくめこちらに向きなおす。

「重ね重ねマスターが申し訳ないことをした」

「あ、いや、別に。これからちゃんと説明してくれるなら、大丈夫です」

「お心遣い、感謝する」

そうして彼は、話しはじめる。

いまだ私が知りえない、壮絶な椅子取りゲーム（殺し合い）を――――――――――。

第七話　夜が明けてからの一騒動（後書き）

（一体何処で彼の声を聞いたんだろう？）
（なんかアーチャーのヤツ、高倉さんに甘くない？）
（もう、君にあんな運命を、背負わせたりなんかしない。）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7987y/

Fate/RADIANT MYTHOLOGY

2011年12月1日02時41分発行